

演出家 Paul Stebbings による「十二夜」作品解説

本作品は、シェイクスピアによる喜劇の最高傑作です。シェイクスピア自身、本作品後、事実上、純粋な喜劇を書くことをやめたことを認めています。シェイクスピアは、喜劇の形式を極め、喜劇というのは、人間の条件を忠実に、悲劇的に反映した混沌であるとの論理的な結論に達したのです。本作品は、古典的喜劇は言うまでもなく、シェイクスピアの喜劇の 7 つのルールでさえも破っています。つまり、中心的な登場人物は、一人ではなく、多くの登場人物が重複しているのです。純粋なハッピーエンディングではありません。中心人物同士は結婚し結ばれませんが、ヴァイオラが女性として登場することはなく、結婚式の場面もありません。何よりも、フィナーレは、マルヴォリオの復讐への叫びと、フェステの長い悲しみの歌で終わります。歌、ましては深い物悲しい歌で終わる悲劇は十二夜くらいのものでしょうか。

この魅力的な作品の中心にあるものは何でしょうか？それは愛です。シェイクスピアは、愛という非常に強力な感情の、大変個人的な、ほとんど革新的な見解を提示しています。つまり、愛は、私達の内にあり、愛情の対象を模索しており、その対象は、性別、社会的地位、年齢に関わらず、誰でもありえるということです。愛は満たされるべきものであり、オリビアが示すとおり、『伝染病のような』ものなのです。愛の力により人生を切り開くためには、危険にも関わらず、前向きであるべきとシェイクスピアは訴えています。オリヴィア、セバスチャン、アントニオ、ヴァイオラは、愛情の対象に会うとすぐに恋に落ちます。オーシーノは、彼の愛情の対象は、オリヴィアへの執着にも関わらず、直ぐに移り変わることに気が付きます。トビー卿でさえも、社会的地位が下である給仕であるマリアと結婚します。マルヴォリオは例外です。彼はある種の愛に夢中になりますが、観客は、その腐敗した愛を通して、シェイクスピアにより、愛に地位は関係なく、人物の問題であり、そして、愛とは、隠しごとがなく、与えるものであるとの忠告を突きつけられます。マルヴォリオは、素晴らしい、喜劇的存在であり、虚栄で、自己中心的なピューリタンです。彼自身が最も忌み嫌う様々な表現や情熱に陥ってしまいます。多くの十二夜の演出において、マルヴォリオは、よぼよぼで、横柄な執事、まぬけで、危険性がない人物として描かれています。しかし、シェイクスピアは、彼を作品で少なくとも 3 回、ピューリタンと呼んでいます。ピューリタンは、劇や笑い、まさにシェイクスピアが推し進めているものの、致命的な敵であります。ピューリタンは、シェイクスピアの死後、原理主義宗教のもと、何十年も劇場を閉鎖し、音楽、ダンス、5 月柱を禁止しています。シェイクスピアは、素晴らしい技術で、時に厳しく、ピューリタンの取り壊しに着手したのです。マルヴォリオが、ただのよぼよぼ執事であるとしたら、残酷すぎます。そして、シェイクスピアが観客に突きつけている見解である、『輝かしい腐敗における愛の倒錯と人生の否定』に立ち向かおうとする際、いじめられているマルヴォリオに同情する気持ちは混乱を生むでしょう。結ばれたカップルのハッピーエンディングを演出したい願いにより軽視されがちな、この素晴らしい作品の最後の 2、3 行に焦点を当てることが有効です。オリヴィアとオーシーノは、マルヴォリオの登場と、復讐の願いに深く傷つきます。これによりそれぞれの結婚式を延期し、いじめられたマ

ルヴオリオと和解するためにフェステを送ります。なぜこの出来事は軽視されるのでしょうか？なぜフェステの最後の歌は、マルヴオリオに対するものではないのでしょうか？なぜシェイクスピアの問いかけ、『マルヴオリオは変わるのか？または復讐のために叫ぶだけなのか？』は、未解決なののでしょうか？

『楽の調べが恋の糧になるものなら、そのまま奏し続けるがよい』
これは十二夜の最も有名な行であり、音楽は愛を生み、愛は、誰も抵抗できないくらい大きな力に成長し、しかし、腐敗の可能性もあることを表現しています。私達は、人間であり、そして世の中には女性と男性がいて、そして女性の中にも男性的な部分があり、またその逆もある人間性を享受すべきなのです。このことを否定することは、私達自身の性質を否定することであり、これは、シェイクスピアが、この最大の喜劇に埋め込んだ糧であり、私達に課題を叩き付けています。